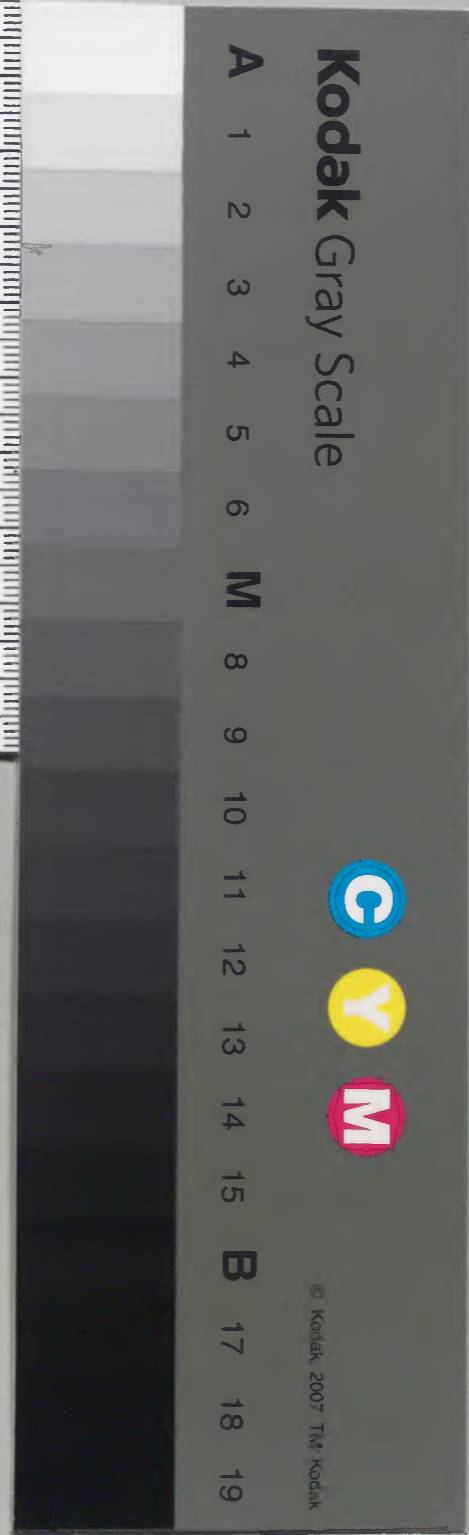


續未曾有記

和書門			
二八	九一	七	類
一	八	一	函
一	一	八	架
〇	〇	〇	冊

庫文閣内		和書
三七	三九	類
函	一〇	號
二二	〇	冊
架	〇	架

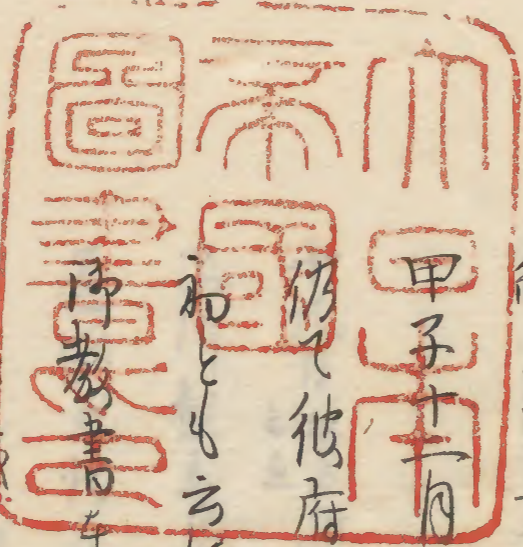
内閣文庫	
番號	和 28917
冊數	10 ( 3 )
函號	177 1137



糊などで貼り付けられている部分がめくれない箇所あり



續 未嘗有祀上



鈴木重壽可南  
山樓珍藏之記

甲子十一月未の二日魯西田人湯陽より舟をもちて  
彼府に池を築きて  
初とも云はれり  
今もありしもの言はる

と傳はしり  
後祀を  
府中  
と傳はしり  
後祀を  
府中

ふ化し丑亥空ら月十九日羅教を修南か  
ふ川より歩み諸越の流橋か  
たのふり今やとちや  
生極業の預じのためと心西と一と



晋あり進考我推考の日記を未嘗有記と題  
せしむるは是を未嘗有記と云つて昔人のゆゑも  
及らぬ魯西西人のたおつたよの浦よりゆゑ事  
未嘗有記と云ふは未嘗有記と云ふは

續未嘗有記上

十九日 晴 時 孝岩前より三徳山へ付し申道よりあり

不川観音堂前の酒壇へ休んはるのをもるむけし

送別の詩を競ひ吟し給ふ森を廻り大森 共所の西浦田

村として白梅千株あり八九年前番希たりトと云ふなりとあり

さそひしえふと云ひたりきまおのひより梅の白くさるるを

その時の只 和中教 休不川へ川流よりむが苗名を荒南

海と云ふは流るる大森のまをりき定らるるはおにのまの

摩の未流より多摩那の浦なるれは多摩川と云

玉川と云ふは玉川の一より海道を一よりいかに







道場橋と云右の遊行寺あり一遍上人の修行の  
知るる清浄光寺といひ所字の惣本寺なり十景の  
るる人曰く勝多寺幸強附合論るる是れ什宝鬼摩  
毛の雲山崇に  
室通室照を照而於の古鏡一而流るる古物といふ也  
天狗の爪も什宝入る其爪を回らざるなり  
中より白鶴鳴物あり延尉義経をを尋る由縁詳々  
あるは合する事とせし

廿一日 晴 午時に谷丁右の大山あり松の並みの中右  
の古樹あり古本松として隣倉右の松の仕立場とい  
と云十石板一説古木  
柔板南に何所を離れしる古寺あり  
よ余根山近く見らるる入川舟渡り昔は五橋川といふ

水深の甲斐の猿橋より流るるとそ東麓よりの流に  
三浦義隆の橋を五橋川に橋とて建つれは橋  
供中書の前右の古松あり土境右の古松馬  
し其言を中に入り死ををる入川と云平橋三言  
花の鳥橋橋といは  
十三石右の言麗寺あり  
古後の山林中花の咲けり大松五体平橋  
二十石花の  
延基寺の古松あり遊女席のつるは付くをみし  
云僕の本ま度う祝ふんより是を射し矢を設け  
るむ所く一矢を齒牙の及ぶれは走らば十石慷慨  
愛於免血争武人犀甲拒妻婦尚時誓言を不須



成共石仙望まると飛山林平の他ふれたりのわづら  
跡のたりは略之河あり西村法師の略之河の歌三夕の一  
つて婦女きき子も知る知る山家集の秋ものつらか  
るはる及うんとあり名勝をさしつて縁のありは  
これと共ち藤十郎の海濱を過りおかの秋をよ  
かへて後とてと云傳つるよりして元禄年中御供  
師三の風樓記一筆を結ひて古蹟とてめ  
を上りの書より西村の十に集の宵傳言雄々のまの他  
と云實の中を多井雅章にのやうひの以略之  
河よ之景傳つて「あはれは秋のるれとも知れり

略之河の昔は庭跡に自るもの程丹實の二の  
秋松をた包ね監念色今も秋むかしの秋をよ  
をよ略之河のまのれの空自を程丹ありまの西  
村の急流舟楫あり真層のいさ三千の禪もあり  
庵定の庭つちれはあま得く画嶺まわわく何  
豆のあ傍遠の足つそのたりまのよとらまのえ也  
鶴れの流波の山色いとま切通一右の地蔵堂  
あり玉府新布お接玉府の流るまのあ海  
松林をわくたはあまうそ我中おる酒匂のまの  
有と云酒匂川あまのち回まの糸郭まのつて河まの







子雲寺山系土代の横あり湯本村入らるる我  
堂あり藤の葉ふくみ樹有て下なるに下はどの  
石上布の足指とくし何とあり足指の所より  
川を隔て下分あり伊豆とくし下流の休多花  
ぬし枕物細工敷ふ中序のむきり付向ふ庭より下サ  
之下り秘の枝の右つ古七名延たる細枝のつが  
足事なる湯本まじりありの枝を上りし出たか  
言枝を上りし枝の右よお布の隠実石とくし隠  
路ありとくし古依の杜撫一糸を了り右よを嶺の  
後七湯ありとくし上りなる山尾也山の中腹より

細きく二きく流れし川の流せし山はこ  
隠るを思ひか滝と名付川端所ま布あり橋を渡  
てまじり門をたのし右の山をふりてく其門もおより  
尾し川より須雲川ともいふありの湯の流るる  
をたのし渡る其も須雲川の落合の細のたのし  
石なる細の葉なる色世々細右の石を細の細なる  
湯本同一枝なる自然の山を石よりするは他り  
滝を二段のたのしけるなる碎るなる玉のたのし  
系面白くさいくち枝より右の岩掛石あり又標も枝  
上り枝より上る右の山陰の白の岩あり下り二三す



のち坂をちよと結ひ下げてしその橋ひもちよ  
勅橋を是を風穴と唱へ風の生る本とてたの橋系  
の谷ちよと純子の口上る二ふ山の麓ちよとまより老  
の卒をよと卒恒ちよと浦島の左帯あひまを柳  
の知ちよとしよ程の文庫山つまの要害山とちよ  
ちよちよとてしよ向ちよ恒ちよと上る元宮形ちよ右の  
方ちよと恒既ちよ下り恒ちよと其知も社人の案也  
て恒既ちよと多恒既ちよ八所入込ちよと湖水の谷を也  
る其湖ちよと後赤の常生るよと下りの老岩程の  
石橋ちよと官布義層ちよと古傍厚し内陣ちよと

お礼は 後起別よ 石橋の下は 赤福ちよと別あり  
ちよちよと

ありとちよありて 竹あえよと古傍のをよとめしちよ

先の急ちよれい 辞しちよちよ 竹あちよちよ 赤福の  
ちよちよちよちよ

しよ一後ちよちよ 我あちよ時致ちよちよ 湖あちよ 陸ちよ  
ちよちよ 湖ちよ 湖ちよ

一は 昔の湖とて 右の 府の 橋あり 湖あり ちよちよ  
ちよ 三に 幅ちよ

さいの 湖ちよとて 地勢あり 往還ちよと ちよ石を 置る  
とちよちよ ちよ 橋を ぬし ちよ 橋の 基よを ちよ ちよ

新ちよ 町ちよ ちよ ちよ ちよ ちよ ちよ ちよ ちよ ちよ ちよ  
ちよ ちよ ちよ ちよ ちよ ちよ ちよ ちよ ちよ ちよ

上り 板 橋 池 ちよ ちよ ちよ ちよ ちよ ちよ ちよ ちよ ちよ  
ちよ ちよ ちよ ちよ ちよ ちよ ちよ ちよ ちよ ちよ

尾 亦 橋 往 ちよ ちよ ちよ ちよ ちよ ちよ ちよ ちよ ちよ  
ちよ ちよ ちよ ちよ ちよ ちよ ちよ ちよ ちよ ちよ



其の山ありんやを元よ也昔もなると國中を登り  
付ぬ家よりハ渡しかはれ徳もなると先馳埃坊  
とくや根事の昔はそふくひるを國門ハ右向の  
高士古復もけ装を刷ひ行者の列を正し肩  
響の空りなちハ通ち一層更しく高士を百ある  
博身裁と傳しそと國系ハ宮根跡 直体十内川  
ハハ八丁  
宿町より十河斗上る坂を向ふ坂よりハ頂上より豆相  
ありの標ありあり是より登路あれと論せるふふ下り  
るうかやと石石予板枯も坂あり朝日曇りし山  
走る時ハ月あり汗をぬ山嶺の宿も憩りて雲霧起て

るふ須東の麦無深山の志るしあり享無  
予宿響の麓岳ありて自雪のふ高も見たり  
山中岩体長板なる体是より下り板橋平り  
なり一ハ山草を若子坊のそ何木の五ふを道  
りさるハニ一なるり右ハニ島田神あり昔成る  
も及くハ多宿を以て一梅止宿 ハハ  
三ハ八丁  
北三日 ハハ  
ハハ 陽路のハ其路のふふされハ旅舎ハ  
かハ居りてニ島田神あり類ハハ願ハハ社也  
播磨豆三あり三橋神あり多ハ神ハ山神  
命社傳ハ天平五年ハ徳府よりハ治承年中より



三代將軍九代執権ともよみ恭礼あつて同國も  
寄附あり伊豫の三島の嶺神といふ能因法師  
所るの寺よみしをると鳥丸光彦に共託あり  
洪くありて金根つ登るつとよみしをり  
川にせきありをせきとめし今も三島の神あり  
神名止んて修方とありと云傳し所を  
石子千尋戸井あり伊豆の島を築つたりて同國の  
秘子送りともいふ所の名ありを中一石長  
二十三尺あり都下の上の極といふ  
此名下りて富士を右より見るまじり山は隔る後  
海新箱茅隈川村観音寺の龜鶴の塚ありといふ

たりと云々測山と村山王社富士御積の谷あり  
沼津体ニシマヨウ宿のたり沼あり是よりうつて  
沼津と稱するも一社の右側は城あり山之羽  
流る河たりは千尋といふと云はれ宿の石橋  
ありしりし此所のる富士の眺をむる一か  
ん思君不見下渝易と季青蓮の化意を以章  
取とてしを稱する一は葉あり雲霞あり絶景  
云此よりぬひありと何を何極なり下系体  
宿津か 宗と名ありといふ下の跡をノリり愛魯  
一とせし  
山ありと景望るといふる皇物と云はれ同しと云ふるあり



とも金根の方を望むともぬまかぶともむか  
の清見園より祇堂を通り足柄山を絶り金根の  
かりしなりされの新羅三布の恰工所新ふ大令  
洞の秘曲を傳ふる足柄山の家子んとあり深島か  
る山と尾とのるの度堂なるの鶴のの軍つる地  
けるも宜らうりえ吉子むかふかふの跡ありしり  
相宗所は富士沼の昔子の地よありむかふの車  
西三ア斗り富士川の急をい獲たりとを平氏  
の軍勢かあるもの相宗の墓一知るふん今もあり  
てこづりの記ともある 相宗の墓をいりて相宗の墓所  
ふんかふやまのしりてあり

富士山の事は於官香の祀者人の身なりといめ  
悉く皆人の知る如くその何とて貴き人さふより  
祇堂を周縁一途舟の繋るまふよまふせよ馬の  
鞍をいす湾り馬の信せしけ吟を西向しは悪くこ  
神のまき融たり時か治かこくしきちひやそ一  
唱唯得る我時なり三國一の名山街道一の元まよ  
日本一の日和の遇ふ事せ匠の也祝なり今相已  
の卜り以家の車の角よつこら白雲の立よつよ  
なりしら昔ふよ若くまをい遊くと雲せしや  
て山色も見ぬかくれつ白雲仙常地山腰と舞天



く勾子山にあり青糸置体 三つ折たるみ川富士  
川の支流なり古儀川を土人の能るり橋道三波元  
ーとしよえ市場 富士の白酒 名地なり 田道いささの雲の吹  
拂て富士の姿いえのとく室原山よく之も土人の  
小富士と唱ふる富士川の青糸と蒲原との志中なり  
川の幅の増減も仍て室原山に來り流る大なる中流の  
急流なりとあり流とく向う岩瀬所体川を  
越しし眺れ富士の景色も愈益なり岩瀬を  
越しし山林のるを好とも富士川をたりのしんた  
ら富士をたう後うんる川を離れし西をれたり

南溪蒼々としててを渡りてある巨岬の希あり  
海斗力に七絶坂をとり止扇 七つ折 吉子山  
其に お 怪 お 吉 お 井 お あり河 お 傍 お ありたり お 地 お 境  
溪河場右の別れの所あり由井沢 浦原 由井  
川の海原の石海原なりまがう石折山は傍て海を  
たよとる倉沢体原に薩塩山の東麓なり茶  
布の懸り海原のま造りし海西函館の三保の  
松原なりよしのえ後し道中を双の好葉なり  
薩塩山の岩城山なり倉沢をたしまよ山の如  
地なり是より歩けし富士の景奇妙なり



坂二馬坂路の坂の外平下是路より往古地蔵  
薩埵の傍其傍のあみかりて上りしより  
薩埵山としり峠より右土河薩埵村東勝院の  
彼の地蔵を安置せしとそ薩埵巖合殿のりり  
ち平化のありまより午房坂高嶺坂女ま坂  
あり山下の海峯をのさ嶺としり船中観志の  
に子知れしとしり岩石多く言浪亦あや二橋  
寺の廻る高嶺を顧るの眼よりせいの岩より  
とや雄夷地言さしり何似の响曆年中韓客  
聘の爲の今の道をひりくより海峯を定りり

見て通るより麓の洞村としり離るを也頼  
て奥津川浦田川ともりよ高嶺の否何しり石を  
数なり去り去り月津波のかるとしり奥津  
河置体由井より沖河ともあ山あり其勝れしり  
あめ思より上の方中むれあも色長く言く和らぐれ  
其事なる後勤あしりしり  
右に法尼寺石燈臺りし客殿のありあふたの  
石浮屠庫裡のありの鐘樓あり昔のふを塔  
今にあり堂あり十七名の優毒ありたあめ  
画の色舟のりりしり法尼園の古扉もあしりしり  
も修院の屋中よりしり我狼藉たれしり昔のせし



田子の浦三保の松原服の下に足つて得もこれ  
に遠く見守の松の共門前よりと村老より遠く見  
遠く見の浦遠く見の松原とも皆松原の事なるは  
南田川庵跡なるとも此ありたるんさたりたる  
に江鹿体 鳥居より 田子の浦田見ともいふまで  
遠く見鳥居より遠く見なるは海客の志号なる  
しとりの松も有寛の松給同より鳥居より江鹿  
色ありたるつて田子の浦なりとありたるを田子の  
浦ともいふ乃ち集山色赤く田見の浦は松  
お而見者真白衣不盡能言嶺子雪波零あるを

新古今より田子の浦の事とあるは徳をより田子の  
浦より富士の尾に浦より傳ありたる富士の尾  
るなりしとある事ある松原の松原あり三保松原の  
後府よりなる斗り車清あるは清より入江平所  
船より三保の松原より陸地に入りてなり三保の  
西より東よりありたる洲清なるは見るの浦三保の  
一名なり松原の中は三保の神社そのなるお衣の  
松一松ありたるを有松原とすに鹿原をいふは  
巴川有松を見てもしとりの右の田圃中一松あり  
三保斗りの古松あり姥の池とて姥とて



川の邊上るるりり里後さぶらふに古田体魁個  
長沼狐湯右の方十七八丁の橋を築けり横ありと  
り田の上ありかね等の村所ありその中ハ林聖  
なる府中止宿七時ハ辰より古くハ五府なるり  
阿波の市と云ふ今ハ府中より後橋山を築築是  
と云ふ其麓ハ湯戸社あり府中のせ土砂なるり  
府中の北二丁斗りハ定久保親音あり其の名産  
人の志るるなるり南城の西守松平信俊ハ熊若行徳也  
其の〇〇なるれハ今西ハ官途の定親有  
てあるるハ信俊ハもとめしハ希後ハ多クハ信徳也  
其の〇〇ハ西冬より所方ありて子孫ありと云ふも亦  
のめらるる者ハ其を帯し西津の長崎斗五希ハ信俊ハ  
りて候をさるるしハ信俊ハ胸つたれと云ふハ禮をうるを

のこの幸侯よ  
にありと云

廿五日信俊相中ハ斗りあり右ハ金城なるり  
戸門ありちのの板野從室よりんて所をさるれ  
て孫勒所居ハ安戸門の渡口なるりた場と云ふ  
備むる石ハ多ク石名舊石等あり巨形付く候を向  
其のめち言く盛り  
三方ハ載し容を上吊に都りりり巨形付く安戸門の  
候を安戸門と云ふ事ハもと云ふ  
藩政裁きあり其相をきんたの下於ハかきい也  
右ハ後橋山ハもと後村古跡ハ北邊千尋の所  
の古跡と云ふハ信翰ハ体政府ハ指りお川橋あり  
わあさ丁ハ連勢師字長苗治ありと云ふ山尾の入口



うねの谷とて名あり十数ありなり山の谷の流しとて下り

山の平路より何れとて地系あり十数ありなり地系は借を解とて

たりは横に流ありとて古く右の谷にけれと今ハ

舟を流りたる嶮道なるより舟流りかかれいよ

く路細く山深しとて山寂たるに方の谷の嶮

あり今ハ谷にありとて舟流りかかれいよ

音さしありとて舟流りかかれいよ

宿の谷よりありとて舟流りかかれいよ

とりて谷を流るも舟流りかかれいよ

流るも事を知る舟流りかかれいよ

たり河に横より所をとりちたしかり宿の所ハ橋小

橋右ハ橋左共橋より舟流りかかれいよ

入る中右ハ橋より舟流りかかれいよ

田中橋あり舟流りかかれいよ

たの右ハ橋より舟流りかかれいよ

走る道をとり舟流りかかれいよ

井田橋あり舟流りかかれいよ

其川の流るも舟流りかかれいよ

利流るも舟流りかかれいよ

あり容易なり舟流りかかれいよ



其川の石路を踏尋して合谷止宿 合谷止宿

廿三日 晴 時 暮合し 曉發し宿を去る 合谷止宿

極道なる上方を和倉山としし極上なる後防の家

河 名 始の候 其の極上宿を依那の山の中より西村法師

の年たけし又山も下りしと云ひ或や合谷より下り

依那の中山と云ふ一宿あり右より左に下りみも

言山を渡り岳としし世も合谷山と云ふ合谷山既音

に彼むくんの終ありと云ふ事極上にて兼川所

川上をわきくく瀬と云ひ山上の宿あり 合谷止宿 其の兼川所

昔の秋場なるう後基野原の菊池よりして遠くの軍

よ光親云の此宿より昔南陽縣の事あり 合谷止宿

坑地 齡今車海道のさく川宿西谷七合と書

たりし事と云ひて 合谷止宿 其の兼川

の川一宿あり 合谷止宿 其の極上より

なる 合谷止宿 十町斗り 合谷止宿 其の石路の志中あり

名 合谷止宿 其の宿なる 合谷止宿 其の由 合谷止宿 其の宿なる 合谷止宿

知 合谷止宿 其の宿なる 合谷止宿 其の宿なる 合谷止宿

西 合谷止宿 其の宿なる 合谷止宿 其の宿なる 合谷止宿

所 合谷止宿 其の宿なる 合谷止宿 其の宿なる 合谷止宿

あり 合谷止宿 其の宿なる 合谷止宿 其の宿なる 合谷止宿



ヨソ  
み新婦の田姑の湯とらふとそいふ田姑の池をぬ  
川よかゝるちうり橋を渡りて掛川日掛り休一里廿五古城  
ありおいけ何懸田後川村休脊川村脊ア村花むら  
休井休掛川所郷の橋ありふふ河中橋の  
熊堂橋尻あり之番カ昔橋みくの橋尾附休井榎  
三右の方まア斗りよ後を二の巻尾曹田字  
の孫割可懸赤あり河をられりうまはるまらる  
右の石道一アをかりとく右橋の陰よあら  
りし虫橋の諸屋もふく通橋ありとまきくふあを  
本居をり屋まの令しえ石道を往て地秤を記

ませしむ松のとり口右の三本松營吉ふ申候一を  
の森池田のち龍川の端より川上のまの花一の池  
田の宿の傍熊堂女の古橋も古真ちの内ありとしよ  
ち龍川幅十餘町二流なりちち龍中ち龍としよ流の  
源方の湖まは海なる船渡し時しもあ海し  
あめ取に戸とま都しの中分なりとしよ川の西の巻  
る易の森中の所あんま橋十二右の沼ありかしと  
村所のまぐれ右の方遠し味方なりとしよ桂村村  
をしあり三三右の濱松止宿右の後訪内井  
あり城も右あり引る壱の濱松のちとしよ味方



うるるしもの旧名なりしを

廿七日時お号り吉若村の江毒板橋より新田村に下る

池ありはほろ村たり、海右に入江なり、海板

岸に水涯なり、是より船より一水上に十餘所と云

今切とりの湖と海とのるの道明徳年中地震

より切て湖と海と一よりぬるを今切とりの

流より承とせよ八月廿七日地震も地破れしを切し

とぬるしよ、時しも干はるれ、海より船より

舟より安しわの方、漕上る板橋の岸りたる海を

とる、按るは、海古く今切よりなる、さる前の道の

残りたるもやあふんや、各深き船より、花席作りた

る船よりあり、移り宮あけし、眺をえり、ちる色

融和風波あり、や、あふん、あふん、あふん、あふん

後をえれ、とも喜信た、あふん、あふん、あふん、あふん

漢より船の敷う、あふん、あふん、あふん、あふん

より上れ、宮門なり、吉田居士の、あふん、あふん、あふん

武田園より、あふん、あふん、あふん、あふん

を、もとの名なり、昔の街道と、あふん、あふん、あふん

橋本より、あふん、あふん、あふん、あふん

街道と、あふん、あふん、あふん、あふん



瘡したりと云右の松山。踏て云師山なるも三参の標  
ちりとしり。汝に松上りて南海を走下るに松  
富士も能く見ゆるより。され共産くもりて見しに  
そ富士の足跡の是より富士足しと先年の回  
かこるより。字の連うもくも佳期なりと  
散生遠くゆたけ。一に松尾を平の嶺名の松を  
る松かかく。あてんし。早のさや合する。中  
よか。三保の内海。四の浦。おてんれ。念  
まの。ゆ。山。心。ほ。け。た。る。ま。皆。湖。尾。松。上。り。果。れ。ら。ま。し。を。受。  
休。荒。井。の。り。白。若。と。し。り。の。猿。の。ん。は。の。橋。候。猿。の。一。る。橋。の。  
一。に。せ。き。を。南。上。店。あり。猿。の。一。る。橋。の。  
左。右。の。よ。し。と。云。右。の。松。山。の。地。なる。ふ。の。方。り。

右山あり。三をの標ひあり。二川。備。白。松。の。柄。松。大。岩。  
ひ。松。あり。三。を。の。標。ひ。あり。二。川。備。白。松。の。柄。松。大。岩。  
村。たり。の。岩。窟。の。観。音。堂。あり。明。和。二。の。の。此。の。者。  
とも。ま。か。を。せ。し。れ。一。に。山。の。真。上。の。観。音。合。係。を。  
たり。往。還。より。か。そ。く。も。右。の。山。の。真。上。の。観。音。合。係。を。  
り。山。あり。石。梅。山。と。し。り。奇。形。なる。山。も。あり。吉。田。止。宿。  
七。の。村。の。名。城。の。右。に。あり。  
廿八日。の。吉。田。宿。に。廿。軒。集。の。門。を。豊。門。と。し。り。  
仔。多。む。し。の。油。桶。の。名。宿。の。右。に。あり。宿。の。名。宿。の。右。に。あり。  
た。ま。松。山。の。竹。の。庭。と。し。り。古。城。の。跡。と。し。り。と。し。り。



右に本寺の地蔵一とて道ありあり井今町の海上を渡  
りて陸地をぬ渡松の東にあるとして赤松寺に依り  
山の中村に法蔵寺あり此のた例なり行基の宗  
基法は字ありり本寺の阿彌陀なり

本照字はるるのありたり門のその名ありあり  
智縁ありたり右に古松一樹に寺榊也といふ檀上の地  
所ありあり智縁の地所ありあり而令之  
所ありあり智縁の地所ありあり而令之  
所ありあり智縁の地所ありあり而令之  
所ありあり智縁の地所ありあり而令之

此の信作連のこれ一画像あり靈夢の一書の奇を  
得させられしを智縁の地所ありあり而令之  
施し智縁のこれ一画像あり靈夢の一書の奇を  
をきん君のこれ一画像あり靈夢の一書の奇を  
系一幅ありり智縁の地所ありあり而令之  
智縁の地所の智縁の地所ありあり而令之  
名号ありり智縁の地所ありあり而令之  
字形は勝たる中より智縁の地所ありあり而令之  
本寺他を傳つるは八雲の地所ありあり而令之  
の莊飾ありり今世も多かりり用之具ありり



鎌の者よりし殿侍さる狎ありは幼雅の由もよぬの世  
実りのもと足もさるゆへくは尻りいし又は先ては僕り  
の青貝御机ゆの基は祝言ありや縁とさる一若き  
所化の由言ふ入るりしは形一長刀の身はそのお付  
お強勝斗倉卒の寓目記徳は深る事のおあつ  
赤豆扱共ゆつゝありしより後川体 赤豆扱り 島のは  
ち卒ら川大志川男川とも云ふに十二万おけのには  
崎止宿 七時迄 後川が  
廿九日 晴風烈し 宿松松葉川橋二千二百名を別川  
に架る鴉ハ二百八名は海道一の古鴉なりを別川

豊川豊川の三方海あるもつゝ三海を号ししより鴉  
の前後ともを矢別西矢別としてむかひの所宿なり  
矢化とも書。女の憤も西矢別のたの圃中にある  
とそ共し一去る車の方虧損し補正は永渡し  
ちりりふんきくさのの路日通雷あるもさるしん  
船をつさるを船として数十人古儀指揮の指揮する  
者とも池ちうひとるがかりとかいよ一さゆのあつたの  
くしゆくうとよ板の村尾流のに大演体 喬妻能  
安ん城今村西四一斗りたりも八鴉の古伝ありし  
云池泉新 立体 三三三 宿のそつれよお妻川右之知



之の神社なる池あり觀射多しといふ池觀射  
の名は昔有紀芦原いも川今島村三尾の標為尾  
上と國よりかゝるとらんよる桶狹多しといふ  
義元生害の知たの松山の中子墓あり有村とい  
伎深名養なる所謂 衣の古言城の記ありといふ一  
ちと坊して沼池 池觀射より 二里三十丁 昔一其浦一仙人振く等り  
あり坊の記は化一神とていふ所の言僊人の傳の  
旧記ありといふむかしの沼池記を足傳し傳傳し  
十二のよもさうたる沼池記を一名曾の傳といふ  
中島といふ二つなり筆ち又林山笠霞古本言十一而

觀音延吉の以沼池の古者の侍女さる信し止かを  
運小ある所村の降ありて靈傳の水の漫るを此一み  
芳の笠を着せよといふ由路の仍て今も笠を  
彼一本さるるやう笠系といふ力被村たりといふ  
白山崎橋右の十丁平の名古屋城尾ありといふ宮止  
而 八重の尾尾の古ありし所系下おえの  
俗務あり沼池よりてま  
二月 和 色七 誓詞の文は社をより三に丁入る和  
地は源右太社八敷の社あり古名石原なる為 相干祝  
石より一万の大社なり此先つそわいけれは卒忽し  
あれ一本社何れに足跡を奉事そあし 供申岩倉神  
奉事の奉歴







あざけ川古橋の十石宛田休鏡拾石味をばの村なる  
の川古橋の十九石に日市止宿（葉名）宿の入  
りよ三石川古橋三十二石又川流川ともしよ一上  
より飛古の溝あざけやうふんくこころに日市の海面  
形古の溝とりの喜ふのあいご誓身橋を土らお  
見るとしよ

二日（葉）市より村ありなり村日市村をりの  
村の神田山と進ふの所休所をりれをり、伊勢松橋  
右の系道なり系女村橋ありふ十五石松橋日市  
武弓車征の故るう有とりよ十石村大谷村勒ヶ石

葉師（日市）村より橋下は臨鏡院あり屏ヶ石佛葉  
師の古弓をあんらるる川古橋休師より十石  
斗りよ白弓橋として日本武弓の陵有りとしよこ  
系山とせし満し余を基一宮田中宮田八王石宿  
あり西宮田陰ヶ川泉橋七十石田中宮村川合村川合  
橋十三石己の村新河入口より右に龜田城なるも龜  
山休（北）聖より聖虎園よりたりの沙川におちち村  
宮川古橋河村右にち羽の羽田山ありたしありし  
りよ宮直休（龜山）古し共をよ陰麻の宮あり新  
中地嘉院あり行基の他再興の時一体の完服せし



たり一瀬村鈴鹿川たりは流れ右より左に流るる下  
りて美濃あり八十瀬の川といはるなりとやふる下  
よりろひりれて鈴鹿川八十せのなりと云ふ所の  
霧<sup>キ</sup>旅の情も宿掛打るをそへ山右よりあり奇岩の  
石は居也といへり梅の岩根山といふ所古法眼の石を  
えて石を連りしをそへたりといふ所傳山脈あり  
馬石掘る石歌音石女夫岩といふ形をもつて山  
ありといふ所のつれお葉を掘る下は國が一に鈴鹿  
のりたり此所鈴鹿社の下ありといふ所麻長年中水  
流るる仍し今の地も移る橋二あり三ありありはる  
是

馬鈴鹿山より流たりは田村堂右より三子山といふ  
形の家三つあり鈴鹿の神社ありとあり伊勢  
也此の境なり流にありとも湯の花猪の白鼻  
何れも古伝ありん蟹をたはる蟹を石塔といふあり  
白川橋十三万基上の松山といふ田村丸鬼神と  
といふ古伝云傳上橋を越して田村丸鬼神あり  
田村丸鈴鹿山鬼神退治の事といふ傳あり  
といふともいふ所の膽をとり祠堂千々  
るの勇肝勇威續記諸あり  
ハ多神を以て妖賊を射して除滅す文化の今昔







勢田の橋の坊々たる道より聖路のり古きより候る  
 聖路條よりよりおまゝのあま加門院に糸井おきこれ  
 古にありの地ぬれし坊々をききとて聖路の條より  
 聖路玉川の古流の道の傍りよ長廿廿ニ斗り中  
 一斗りより担れし池の流よりとりし勢田村をて橋  
 橋つめの秀に社あり蜈蚣跡よりつり人早に勝多  
 此勢田橋大橋九十丈方廿二二三男一名を柳の橋  
 高よりせよの長をいふ橋とてろさのえしとて候  
 せり帝城の要害より信承元曆匠久元弘の仇  
 友より防敵の事一諸人の知る如きなり下りて候

龍宮城の通をり知儀を太くむしを道通し龍女よりいふ  
 此龍宮城のありし其知るなり所を字治つため候なり  
 茶壺往るありし必る跡をいふなりし其茶壺の跡  
 高の番なるを秀にの坊跡よりなり今ハ茶壺とて候  
 其しむししきの番跡よりいふなりし其茶壺の跡  
 空りありしなり茶壺のふををまとおのりする具を  
 せりとてり一茶のりし論をりなりぬ事なり茶壺  
 の通のりせりしなりしなりしなりしなりしなりし  
 云傳より候た右山への道あり船の城の湖あり  
 さしとてりし中右村右の船の城下所なるなり  
 り八丈龍宮の社堂は深を階船の深と候なり  
 の村の裡より日次より舟を貢せしり拾遺集に  
 うしとてりしなりしなりしなりしなりしなりし  
 船の目次より船所へえぬもの深なりしなり







お休に朝服を旅装あかた佛々焼七の旅寥たり  
まより新田西河を南よ坊車獨ち暮の森宿前  
をさり車務寺の古雅宿あめち羽立りたくと  
ひよお午の日とり宿あつる集宿集教寺やん  
すいとの並つて車都も西京も和午の飲集り時め大  
圃ともいじつ旅し老の男女あ合庭しあふ塵埃  
を衝切とし暮の森のまられうしかろうしわけ  
通り墨深より右つとれつ所つたさうし休足止扁  
とる大徳より系中  
めた能八に  
五日 曇り雪が かつち 旅舎をあて系鴉を渡りしよ

写鴉より浪舟の官船待備たるよ系よりあつ淀ま  
しお十余町しりし 淀の舟舟の見女あ再つて三事なれと  
ふし白堂よ 近江の湖あ鏡田をしりより石山寺の下  
を堀れ宇治川とさうしてその下流あよ乃る蔭を  
新田をたりよえんわあ川をより下るはあ  
上る引船する淀城より船知つ渡る鴉下を通り  
たりよ淀城なるさる車あり大サ三丈しりよあ舟入の  
桶を付し車のとるる陸の桶をいあを扱み桶の  
うつを機園するその先の城をのるあり水陸の葉  
を作り川をのる引入り舟系よふしちるを舟に



わの方か加藤川の下流下を御色うし掛川と右よ  
めし淀川へ入る御淀城の付しとれはた城のち橋有  
是陸の往界をうり其をしの下か本掛川流れありし  
一りよあるを東南は八幡山麓たり右よ言まは橋山  
ふしまゝいなるうまより右は山崎島より掛川と  
上よ山よるを右も八幡山麓なるたか放生川を中  
の流を流れある橋かこして海内なるは先くた  
右よよくなるわれある小川多し橋も城も数  
有たりは言まふの事多し依故方なるは是より上は橋の事  
依田ち御をこり守はる川中よさるはまあり

古所今市との界海橋の標なるは船を合おを言まは吟ん  
律右よ川よ分る如西法師の宿り江口の事なる川も  
静けく古つのははの道女の舟道遙もあはる橋も  
是より川中島の地なる又中津川右よ分る小川  
柄村といふ古くは古柄の橋ありあはるや是より  
南中流の地なる南長柄をこして源八の流なる  
なより浪花城の月城の其川の南水の里名悉く  
ちんまゝ多し多し實政止るは官許持り置るは  
此よぬるを言まはるは名を言まはるは流りて古流の山越  
實なるは流りあり依田より十三里の船路も言まはる







高敷二十七万七千の戸人数九十万七千高敷に下千一蔵  
場十六船花のた知八ヶ知妓女二名の二百人の諸國の  
と船千艘斗りも力一泊舟の船これとより一且の  
概をりしなり おの上の船中を過るをこれの概属は前者もあ  
れを彷彿し森合の喜しし調ひしある實に  
たり  
七日日暮り水登出と日たしる基の邸も湯も宗師  
大尹府の式も準擬を梅も枝もまらるる宮森かけし  
こつらよ啼しとるこをりちりし風もそく足りて  
さのああさうかひちつたん  
八月晴風極厚何くれと云私を後を促りて天王寺  
へ集りもやととじしも明葉のなる後もありたりし

後者り三語一も空しく一日の傾ぬにむ

九日 晴 舟 箱船共けり風をり後者も飛舟を意

るをかりなる旅舎をあり西天湯小舟をかり上  
三書ト三書を急流の深老ちを右よ見る一十  
三体十双ともお川幅るる也一舟満一出の川  
岸々中津川なり 十三日舟中舟を川につけて  
ゆく海老はとを流れる聖なる海り  
なり海老はと東西太仁村あり十三の舟ありなる海に仁  
境ありとありあるも仁村の王仁をちり仁とてん  
字も付しタイニの藤島は加島ともある外海舟  
かこるる  
海一川幅るるもとく向ひの舟も外海舟なりには  
外海舟一雙の里とやの川も一舟一けれともその知



まのちの隔てり大板指同は内より尾ヶ崎は城を  
右より宿のちをぐれ。貴婦の宿あり大西の  
浦の海客よりちを多く舟を力を知り向は海客  
をい渡り向は川と土人の訛語より武庫川なるべし  
是れ川海客より板橋より作り作は武庫山其上の摩  
耶山志向は尾ヶ崎のたつぼきしたり山は右の山のま  
脈は曹山といふ名あり志は山形は志成の頭形  
りなり西宮宮は太極が中絶る宿あり天の盤梅  
舟よりあれよりし宿よりといふ表門より清く裏  
つらなる宿あり宿は吉の休西宮より生田休は宿  
なり

尾ヶ崎より其をより右の山根をの海客をく醸酒  
の宿をよりちを多くくも生田をわれは酒は乳  
れよりしけりつと所謂生田の森より海客あり生  
田川なるべし。ちの宿をより海客を希見中の宿  
ありといふ右の生田を種多雅日女命を系る境内  
梅花尾の宿の梅といふ名あるより往是のた右の  
梅樹より海客のちを渡り川は海客より右の巻中  
梅の石碑あり宿の梅も梅の碑も宿に強けられ  
是止して宿の梅を期は種多の所をより兵庫  
止宿 七の宿なるは同 ちなるは海客よりちを希見中なる



十日 歴 立 下 り ん 本石原に布りみさ山射たり

和同坪と云庫との龜島にた南の方岡焉より

尾つふふしに宿のおかれ右に三木と云の如ありそふ

小糸貞時の建一平相國の石塔十三を有し八棟

寺と稱するより彼宿の遷都の如の云庫のつる

龜島の東に遠なる柱のぬき盛の石塔に二の塔

あり忽起る詳誰の信を有し宿中の塔は多きを

長田大相宗あり事代を命を奉るふの云ふ

村原吾監お太布の塔ありしり葉帯体徳を

天孫御嘗るの鶴ひのくし如るり行卒の旧跡を

衝のせ捕れり如とて古松に土積あり須广一庫が

右へ入て須广寺ありたの額板のむう軍陣のつる

いさうとしり四とうるある門なる若木の橋なる

行の腰掛の什おき集の宿敷盛中橋おじの體土

祀集ありとを止めはるる斗りの函賣るれ

の限りあるを優るる事もといおぬそあつる

一の谷の上内裡迄しりお絶壁なる似要害の形

勢ありも谷中よりけある如左右毒向と土色か

ころ躰湯も色を介て候あつる平はしりの名

ありしを花の時もあつる志徳も可謂矣土の色







多ること云々あり御中あり其色より仲哀帝  
の陵女輪の石碑ありたりのかかこをかりと縁としよ  
るるの境の松樹下は籠の曲牆根を伴りあり  
み洗ひしあらし松葉落らうりし満より白砂  
青麗の掃たてたるより御列ま川の水より  
あまの似されの境の境と唱るるや古縁の  
空及び水とまきこらき妙きなり往星の街く  
海をく淡路山後を山かきさき岩屋をんとし弟に  
おそり松帆岬としり明石よりさしこりさし  
御所としり山屋のりありんく西風吹おきまうりま

庫あるの浪花ををてる高船の順風を志帆くけし  
矢を射るゆとくはくされり浪葉思の縁としいお  
りき明石直体の障り城の右より城下より新舎  
なくお戸門あり大苑谷としり谷ゆるりし所を本陣  
あり古しゆの月のあこれさうそとをるし酒ナ  
や明るの浦はしひし函越のちいさうそえくたり  
桐より右にめ所入して石名元石松樹門ありし  
正一位人丸明神御さうり家より碑ありし回首龜決  
銘文の林まき赤さうり後で堂ありしを隣り  
を隣を在中宛唐屋銘中一切の中まはのしとの



寺を唱ひて信作一霊驗より命しといひ謫より  
彌氏の信なる一一方を降くか方とよるの刑の  
扱ふといひ梅の首より西へ切り平忠の石碑  
あり梁田支那のつら他りたる文を碑銘の代りよ  
彫刻をとりし方なる保体長地体前後左右の長さ  
池あるもの長地を所名とせざる足所もよる一  
流あり村ありといひ昔の南を印南聖といひ聖  
中流ありありといひ古今は傍人きふに古の聖中  
の流ありぬるなれといひえのゆるるをきる人つそよきと  
足つたりいまりづらる信りしもみやしあかあ川

所中ちの門の巨木あり藤見書と彫りたる  
碑を建つかあ川止扁 日没しむ  
明名かちと  
十一月 無六時  
ある 宿より南の山を越く三十町斗り  
所跡を虫折して尾上の伝吉の社を裏の山より  
信於 益 の木ありるおせの木古くらの古樹りたる  
五年中の枯れし柱礎よりよりいそおせといひ宣る  
るうなる二侯よせおり雄雄の按をあら号するう列南  
のあり古木の幹 ささこーと 三尺の長さ  
さ尺雜物 さ 簾の内よりや は 仕る は  
あり尾上の鐘といひ疑ひる さ 流 は 希代の古鏡



飛らぬより上りたりしりしは是も琉球の訛言の細  
の色を藤のしし毒網の似たり衝と鋭しな細客  
のりあり鉦塚より女樂器の極極に常ありあ  
ふは表のわの松のむむ之おひしりしりし奇麗なる  
り古地海をさしまり西つ折ら加古川の古橋をかゝる  
たあまことゆる屋さ知ら舟よりしりし海にあら川  
はなり飯色の優待しんを形を幕あくる舟を  
遊を共色り海より舟船の入り知より下回しりし  
敷をたれしりしゆし可あ敷河あり言ゆの浦より  
徳園社あり境内におせの松はも古なる秘蔵

し後は柱るより尾上の松とお似たり一苗迄を古  
郊を擡つて真鶴を争う惟る是此を争ふん船壇  
より向し音甚鴉をけ鏡るあり尾上より其外へ流  
路の三十餘河言ゆらあ舟無く流流のり阿蘇  
のあ成り村と姥の松のそれをたしりし似もつら  
は河をさして整村の成れりあるもほやうの一里  
飯よりしあめ山もあめ山も松り有とも一里なる石  
なり山を宇留標の色をとし入ぬる石鏡あり音るの空  
石の空殿より美を其集ちるん一か産名のあるし  
まは静る窟の幾代か絶ぬんし中より一静るくはる



と云々亦ありて双福あり申すえ一をる福のた石  
を印南那より石るた御神言位<sup>ニツラ</sup>た御神と云  
付より其ををた石寺と云し橋下を通り元れ  
石殿あり自然の石をに石に方の福の作きた形  
を刻て切離して之ををよりをたるれ蓋お一之を  
を以て其まの控至る狝有り下のとり切て志  
中僅まをるれは尾も其よりあり早る湯は  
は干湯ありといふ何れも不可思儀と云るべ  
お山に對し一石一山より探きの枝序とやん尾伸  
縮昔し鬼言傳の志先よりぬれ、行者も實業

して上言中魯の山より上りしもかくや田舎  
河のさふ也おる能記及び湯河の山よりさふ  
つきよおかり烟霞をまわし青深淺たり中よ  
一の隠起せるとのありかこ一よりよりあり  
るや觀はるるお祝山をよりけ十條河よりし  
男根のち湯多の諸能探に何尊したる杉林中  
よ御あり菅の自由か載のつとより古木あり  
天の年羅兵男羽衣四筋の時西の枝焼枯と  
り皆枯たりされとも墻ををる巨木のふ守あり  
よま月さま一

御神にの集めの社以松を修る卵  
掘雲ありのう二十首別あり

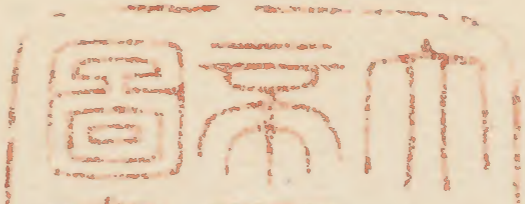


まかり中を舟より一々街道の亘流する海池  
三家控院あり西肴一の川 其色より 姫流の渡り  
姫流 意味ちよに右よりあり河をさして海あり左の  
てハ流せ川とよし西よりハ喜山川とよし山田  
峰を上り下りて坂下河は山田村あり亘流す  
赤坂さる形もあれと早荒ハ山と山との街屋ま  
能止宿 信時を 姫流宿をがれ右より聖徳をる堂大  
門松の並みあり坂越るとしよ

十二日 吉野 山登の後 徳系 けい あり阿蘇川歩  
渡り正系川舟より一まら流る入るあつ川の流

あしてをりつ山道さる山を下りて一馬場村 休ある  
ハ山田の町をつつしあつ切谷の上をもつ 嶺平  
登りつ谷よりつ堂の山つ起して船よりとら室  
止宿 能中 姫流 飯さるう室山の壽永の合流の  
あり一雁さるう ちねり 舟後三十五里 所謂馬下洋  
きつ堂の洞外より多指し南よりさーある山上  
官居より 欽明帝の時よ建ふれ都のか茂と月  
一く一狩の由事なるれ社なるもわか茂ふまあじ  
てよあつ下目のこけけりし山陰より入にありて  
大船も岩よりとるな信宜の湊さるう 中五つ舟の





不詳字何

續未嘗有祀上後

出敷の御人別に千代姫御街もあり室の遊女

るに事ありし遊女の始りなりしと云傳ふ浮雲ちの

門外に室君墓としてあり碑をサハル斗うた二

梵字と曆意の二の字も見るなり古の名流なりし

云傳ふ龍舎の水窟はし降る雨丸の宿先は危檣敷ん

つ御神の事表作けりるく大御由集をさすより土人

酒肴俵をむむとコナ子船は入りの御船の石を御換ふ亭り也

る昔声置しう徳色より西風吹ける宿院明日の字船



